

プログラム・ノート

山田治生

練木繁夫とクアルテット・インテグラとがピアノ五重奏曲を代表する2作品を共演。ロベルト・シューマン(1810～56)とヨハネス・ブラームス(1833～97)のピアノ五重奏曲は、ピアノ＋弦楽四重奏というフォーマットの魅力を最大限に引き出している作品である。ピアノ協奏曲的であり、同時に、様々な編成の室内楽が包含されている。本日は、サントリーホール室内楽アカデミーでの師弟共演というよりも、気鋭の若手クアルテットと百戦錬磨のベテラン・ピアニストのコラボレーションとして楽しみたい。

シューマン：ピアノ五重奏曲 変ホ長調 作品44

1840年、シューマンは、遂に愛するクララ(1819～96)との結婚を実現した。幸せに満ちた1840年は『詩人の恋』、『女と愛の生涯』などの歌曲を作曲し、彼にとって“歌曲の年”となった。翌41年は、交響曲第1番、交響曲第4番の第1稿(後に大きく改訂される)などが書かれ、“交響曲の年”と呼ばれている。そして、1842年は、3つの弦楽四重奏曲をはじめとする室内楽曲を作曲するなど、“室内楽の年”となった。このピアノ五重奏曲もその“室内楽の年”に作曲された。

第1楽章：冒頭、全員で力強く第1主題が提示される。第2主題はチェロからヴィオラに受け継がれる優美な旋律。**第2楽章：**序奏のあと、第1ヴァイオリンが葬送行進曲風の主題を奏でる。その後、2つの副主題が入る。**第3楽章：**主部は駆け上がっていく音階のような主題。その後、2つのトリオが入る。**第4楽章：**冒頭、ピアノが力強く第1主題を提示する。第2主題は穏やかにヴィオラに出る。フェルマータの休止の後、第1楽章の第1主題と第4楽章の第1主題による二重フーガが形成されていく。

ブラームス：ピアノ五重奏曲 ヘ短調 作品34

ブラームスのピアノ五重奏曲は、最初、1862年頃に2つのチェロを含む弦楽五重奏曲の形で作られた。しかし、音が今一つ明晰でないなどの理由から、2台のピアノのためのソナタ(後に作品34bisとされる)に書き替えられた。だが、クララ・シューマンらのアドバイスにより、結局、1864年秋にピアノと弦楽四重奏のためのピアノ五重奏曲として完成された。

第1楽章：第1ヴァイオリンとチェロとピアノのユニゾンによる第1主題で始まり、哀愁に満ちた音楽が展開される。**第2楽章：**第1楽章とは対照的な柔らかな音楽。**第3楽章：**快活なスケルツォ。8分の6拍子の音楽に4分の2拍子の音楽が挿入されている。主部では堂々たる総奏が現れ、トリオは穏やかな音楽。**第4楽章：**神秘的な序奏のあと、チェロが第1主題を提示し、アレグロの主部に入る。

(やまだ はるお・音楽評論)